

陸戦隊遠征

エメラルドの島最後の敵前上陸も成功、ユーモラスな話題をのせて
ニューギニア遠征隊北国丸が帰港への途、突如として、うけたのは
米艦東京空襲。思わず、江戸ッ子と九州男児は顔を見合せた。

朝日新聞社出版局

齋藤良輔

遠征隊の出航

水上機母艦「千歳」を旗艦とする大小十五隻の、ニューギニア遠征隊がアンボイナ港を出帆したのは昭和十七年三月二十九日の深夜であった。

ストラバヤ沖、パタピヤ沖両海戦で、米英濠蘭連合艦隊を一蹴してからすでに一月。ジャバ、セレベス、スマトラ各島を占領した海軍部隊にとって、この世界第二の大島「暗黒の島」といわれる蘭領ニューギニア攻略が蘭印方面作戦に残された最後のしめくりであった。

この攻略遠征さえ済めば、赤道直下に横たわるエメラルドの帯とよばれる東印度の島々は、文字通り大海軍旗の下になびき伏すことになるのである。「作戦は、約一月間の予定で、蘭領ニューギニアへ初の敵前上陸を敢行する。攻略部隊は二手に分れて、およそ十カ所の敵前上陸を行うが、何しろ相手は人喰い人種がいるという未開の島だ。どうもしつかりした海図がない。それに——敵の様子は、戦前三百名程度の守備兵が、それぞれの地に駐屯していたらしいが現在には全く不明である。土地は不案内、敵状は不明の状態だか

ら、場合によっては多少の犠牲を払っても、白昼の敵前上陸もせねばなるまいと考えている」と参謀の発表である。由来、夜討ち、朝馳けが定石とされている敵前上陸戦を、敢えて真昼間でも構わん、やっつける、というのである。全軍の士気は軒昂たるものがあったが、その蔭には、連戦連勝に驕る色が漸く濃くなっていた。

江戸ッ子と九州男児

北国丸の小さな砲塔を守る要員三十名が特別に乗込んで、五番船艙に陣取っていた。甲板にまでハミ出すように乗船している陸戦隊三千名の中に、ポツンと小さく固まっている三十二名の砲塔員は、全く異分子、といった存在だった。

というのには、陸戦隊の猛者連が佐世保鎮守府所属の九州男児ばかりなのに對して、こっちは横鎮の水兵、それがしかも揃いも揃って、チャキチャキの

東京っ子が大部分を占めていた。兵種や出身地が違ふせい、氣質や行動までが別々だった。

蒸し風呂のような船艙内で、陸戦隊員は、上陸戦までの徒然をもて余すかのように直ぐ酔いしれた。そして何かといえは野太い声で怒号しながら、ビール瓶など振りあげてよく喧嘩し合った。

その片隅で、早くも小器用に習い覚えたインドネシア賭博のドミノに、草座になって熱中している横須賀組は、こうした粗暴な酔っ払い同士の喧嘩騒ぎを尻目にかけてながら、「フン、田舎モン」といった表情で唇を歪めることも再三だった。彼らは、ドミノも巧みだったが、洒落や都々逸も上手だった。東京生れの、こんな小粋な水兵サンの姿は、逆に九州男児たちから見れば、都会的な軽薄さを感じさせたりしい。中には、

「敵前上陸までは、大切な体じゃからに、潜水艦など出おつたら、ドンと一

発かませてくれにやイカンがのう、あの腰つきで狙いがきまるかのう」

など、砲手としての腕前までも、ひどく頼りないものに思つて、セセラ笑う佐世保の髯武者もいた。

しかし——敵前上陸した九州部隊の奮戦ぶりも、また横須賀組の砲撃戦の腕前も、現実に示す機会もなしに、ニューギニア攻略は着々と進められていた。

呑気な敵前上陸

三月三十一日スラム島ブラ。四月一日ニューギニア南岸フアクファク。同日ソロン。同十二日首都マノクワリ同十六日セルイ。どこでも一発の銃声もなしに、つぎつぎと軍艦旗が上陸した。無血占領の連続であった。

蘭領ニューギニアに、日本軍が最初に足跡を印したフアクファクの町は、朱色の屋根が山肌の間点々と積木細工のように見えて、江ノ島みたいな感じだった。椰子林の上に白旗があがっ

ている。陸戦隊が、ゾロゾロと大発に移乗した。

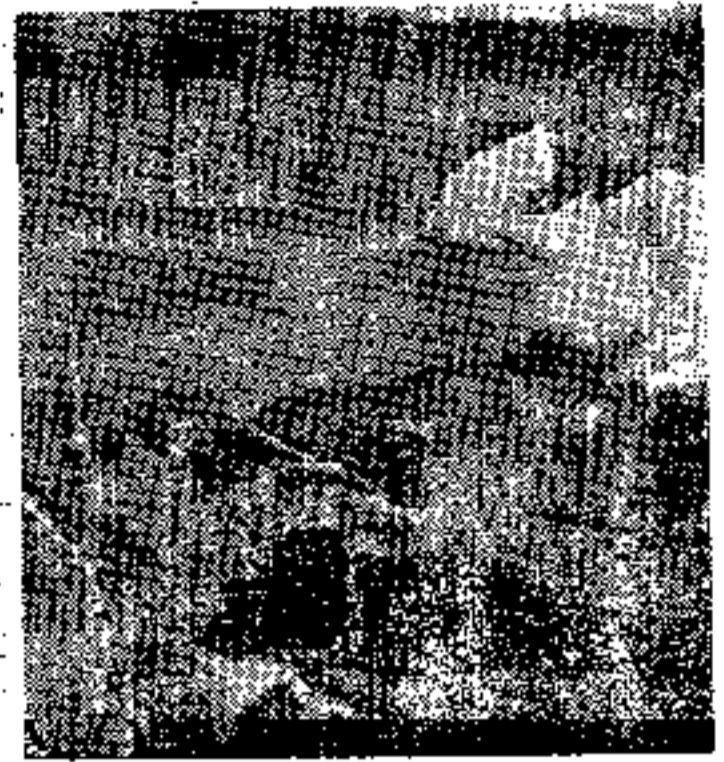
「岸辺に引き寄せておいてだまし討ちということがあるから消断するな。タラカンでは、この手で上陸部隊の三分の二がやられたんだ——コラッ、もつと頭を低くせい！ 低くせいというのが判らんかッ！」

波を蹴って進む大発の中では、歴戦の兵曹長がさかんに士気を引きしめるが、味方の水上機の爆音のほかは、どちらからも砲声一つ響かない和やかさに、兵隊たちは、ともすれば鉄兜を投げて、ニューギニアの風物を珍らしそうに觀賞しようとする。

こうした暢気な(?) 上陸行動が、三週間も続けられていった。

ことに、北岸の要地、マノクワリ攻略の際など、夜明けの奇襲上陸によつて、敵が施設破壊するその先手を打った作戦だった。

ところが、本隊が、マノクワリ上陸敢行の地点を間違つて、四十哩も南方



近ボバこん入り深く湾ルベ

ニューギニア特有の熱気に苦しみな
がらも、ついに一回の交戦もないこの
遠征行で、驕兵たちの間には、一種の
情気が漂って来たのは確かであった。

艦中に咲く二人の女性

ただ、僅かに話題らしい話題といえ
ば、この遠征行に登場した、敵味方二
人の女性のこと、特設巡洋艦の中で
も持ちきりだった。

一人は、フアクフアクのオランダ副
理事官の細君だった。陸戦隊が石コロ
だらけの道を登ってゆくと、イカダカ
ヅラの紫色の花で囲まれた官邸の石
垣のそばで、赤ン坊をしっか抱いて
戦っていた。四月月前、丁度大戦がは
じまった十二月に生まれたばかりの一
粒種だという。

やがて、夫とともに輸送船に収容さ
れることになったが、台所で兵隊たち
の好奇的な視線に包囲されながら、何
かしきりに哀願している。

「どなたか、英語知りませんか？」

と訴えているのだ。
官邸の直ぐ裏山に飼っている山羊の
乳を、赤ン坊のために取って来たい。
他には何も要らないから、それだけを
取りにやらせて欲しい、というのであ
る。

やっこの思いで許可を得た彼女は、
早く早く、日本兵にせき立てられる
ままに馳け出した。

折柄、烈しいスコールの襲来
まるで、滝のように泡をたてて流れ落
ちてくる豪雨と闘いながら、彼女は靴
を脱ぎ捨て、石コロだらけの山道をハ
ダシで登っていった。たった一ピンの
ミルクを手に入れるために――

いま一人は、マノクワリのオランダ
兵舎に、日本軍が遅ればせながら入り
ついた時、投降の土民兵に混じって、
これも赤ン坊を抱いた若い日本婦人が
救出された。

サルミの黄麻栽培に従事していた邦
人の一人、戦争と同時に、夫をはじ
め同地の日本人は、すべてオランダ兵

に行き過ぎたため、また逆戻りするや
ら、上陸地点をマゴマゴ探がすやら、
未明五時の上陸戦予定が、八時を過ぎ
九時を過ぎ、十時になって、やっとな
コノコ大発に移乗という体たらくだっ
た。もうその時には、敵兵はガソリン
を焼き捨て山中に逃げこみ、兵舎はも
抜けのカラとなっていた。

「ヘッ、なっっちゃアいねエヤ。チャン
パラが、このところねエもんだから、
皆んなすっかりタルンじゃってるんだ
なァ」

砲戦配置についている横須賀組が、
船に留守番しながらボヤいた。

に連れていかれてしまったが、自分は
臨月の身重だったため、出産が幸いし
て、唯一人ここに残されていたのだと
いう。

上陸してきた若い参謀は、開戦前後
の模様から、彼女が救出されるまで
のいきさつを、ウムウムと元氣よく聴
取っていたが、やがて彼女が「ウチの
主人は大丈夫でしょうか！」と、取り
すがるように訊ねたとたん、彼は不機
嫌そうに黙まりこんでしまった。
「いやだなア。ウチのカーチヤンがそ
んな思いをする場合を考えると、な
んな舌で威勢のいい横須賀組も、この
二つの話には一寸顔を曇らせた。
たしかに、戦争の痛ましい犠牲者は
いつの場合も、母であり妻である女性
であったから――」。

祖国の危機も知らずに

こうしてニューギニア攻略があらか
た片付いた時、北国丸の横須賀帰港命
令が伝えられた。前の年の秋十月以来

半年ぶりの日本帰還だという。全速十
三ノットでアンボイナ港へ帰航、乗組
みの陸戦隊員をそこで降して内地へ直
航することになったのである。

横須賀組は俄然、狂気のようにハシ
ヤギ出した。
捕虜のオランダ官吏家族が、船内便
所へ行く肩を叩いて、「俺たちニッポ
ンへ帰れんだよ」
「えッ？ ニッポン？」

「ウン、そうだ」
訳も判らず青い眼を見張る相手に、
上機嫌でまた笑いかける。かと思ふと
砲塔の下に張った日除けカンバスの下
で、夜おそくまで知ってる限りの唄を
合唱したり――右に北斗七星、左に南
十字星を眺める壮大な星座の下で、齒
ぎれのいい東京弁が、いつまでも「帰
国の楽しみ」を喋り合っていた。

まさに、一握ぎりの横須賀組が、三
千の九州組を完全に圧倒してしまつた
カタチとなつた。
まるで修学旅行の帰りみたいで、望

郷の甘い感傷が、日本へ帰る横須賀組
アンボイナに止まる佐世保組の誰彼を
問わず、それぞれ胸に静かにしみ通
っていったある夜のこと、燈管下、真
暗な船中に、突如、
「特報 ニュース受取れ――」
と、ただならぬ当直下士の叫び声が
響きわたつた。

「なんだ！ なんだッ！」
潜水艦攻撃を受けた時のように、あ
わただしく轟いた足音が、やがて一枚
のニースに集まると、ハタと一齊に
息をのんだ。
米機、東京を空襲――恐ろしい、こ

の一行の文字が眼を射た。思はず眼と
眼を見交わした。
横須賀組と佐世保組の勇士たちの表
情には、甘く見過ぎていたこの戦争の
厳しい現実をハッキリと見せつけられ
た驚愕の色が、ありありと浮んでいた
特設巡洋艦北国丸がニューギニアか
らアンボイナ帰港の二日前、四月十八
日の深夜のことであつた。